

2012年4月

「コリীগ」45号 目次

巻頭言 (1~2) センター長就任のご挨拶 (3) 山本先生のご退職によせて (3~5)
北垣先生のご退職によせて (5~7) 戦略的研究プロジェクト (8~9) 第39回研
究員集会報告 (10) 国際会議報告 (APA 科研) (10~11) 頭脳循環を活性化する若
手研究者海外派遣プログラム (11~12) 高等教育公開セミナー報告 (13~14) 2011
年度の公開研究会 (14) センター往来 (15) 馬越徹先生のご逝去を悼む (15~17)
金子先生のご逝去を悼む (17~19) 新任者・離任者・就職者から一言 (20~26)
センター滞在記 (27~28)

巻頭言



学部教育の改革のことなど

江原 武一

(立命館大学教育開発推進機構教授)

もう40年以上も教師稼業をしていますが、相変わらず授業をするのは苦手です。学生さんと接する時には今でも毎回緊張しています。勤務先の教育開発推進機構は教員研修 (FD) も担当しているので、そんなことをいっているわけにはいかないのは承知しています。しかし日本の大学教育の改革では最近、授業科目ごとにシラバスを書くとか、半期2単位の授業では15回授業をするとか、毎回出席をとればそれで済むわけではないとか、小手先の窮屈さが目立つようになってきているようにみえます。そこでこの場をお借りして、日本の学部教育、なかでも教養教育のあり方について、少し復習してみたいと思います。

学部教育の実質的な改革を進めるには、大学教育のイメージを明確にする必要があります。そのために、ここでは「大学や短期大学などで行われる教育課程 (カリキュラム) として明示された正式の教育」を「大学教育」と定義します。この大学教育を①教育段階 (学部教育と大学院教育) と②大学教育の内容 (教養教育と専門職業教育) の二つの目安で区分すると、学部教育の改革では、教養教育と専門職業教育の意味をはっきりさせるとともに、教養教育と専門職業教育の具体的な内容や位置づけ、バランスなどをどのようにすればよいのかということが問題になります。

教養教育という言葉は時代や論者によってさまざまな意味をこめて使われてきました。ここでは教養教育を、高度な専門的人材や広い意味での社会的な指導者として将来活動することを期待されている学生に、それにふさわしい基礎的な学力や教養を身につけてもらうための教育と定義して使います。学生はこの教養教育で特定の専門分野や職業にとって不可欠な幅広い学問領域を体系的に学ぶことにより、幅広さと一貫性を備えた知識や技能、価値観、態度を身につけ、「教養ある人間」(エデュケイテッド・パーソン) として成長することが期待されています。日本の大学で教養教育を構成するのは、従来の一般教育や外国語教育の科目、多くの

No. **45**

大学で現在教養科目や全学共通科目として開講されている教育などです。

それに対して専門職業教育は、教養教育を学んで基礎的な学力や教養をすでに身につけた学生に、特定の専門分野や職業と直接関連した知識や技能、価値観、態度などを身につけてもらうための教育です。この専門職業教育を構成するのは、学部教育の職業教育や専門教育、専門の基礎的教養となる教育、あるいは大学院教育で開講される特定の専門分野の研究者を育成するための教育や、専門職を育成するために法科大学院等の専門職大学院が提供する教育などです。この二つの言葉の定義からも分かるように、教養教育という言葉は職業教育や専門教育、専門職教育などと区別する意味で使われています。

ところで戦後日本の大学教育の改革を国際比較の観点からたどってみると、日本の学部教育でも、その中心になるのは専門職業教育であり、教養教育ではないということです。これはアメリカの学部教育でも同じです。世界の大学のなかで教養教育を学部教育の教育課程に組み入れているのは、アメリカの大学と戦後の日本の大学、それから韓国やフィリピン、カナダなどの大学くらいで、イギリスやドイツ、フランスの大学をはじめ、ロシアや中国、オーストラリアの大学など、圧倒的多数の国ぐにの大学は専門職業教育しか、これまで提供してきませんでした。

そのため日本の学部教育の改革では、なぜ教養教育が大切なのかを十分に理解する必要があります。私も日本の大学教育、とくに学部教育にとって教養教育は不可欠な要素だと考えています。また専門職業教育はもとより教養教育の具体的な内容や水準なども、実際に現在各大学に勤務している大学教員がそれほど無理なくできるようなものであることが求められます。

学部教育にとって教養教育が欠かせないのは、今日の学生は、この教養教育により特定の専門分野や職業にとって不可欠な幅広さと一貫性を備えた知識や技能、価値観、態度を身につけることを期待されているからです。これはどの大学についてもいえることですが、学生のなかには、義務教育後に高校で3年間よけいに学んだのに、基礎学力の面でも教養の面でも、将来大人として社会で活躍するための能力を、自主的に獲得できそうにない者が結構いるようにみえます。日本のどの大学も現在、そうした「半大人」の学生を受け入れ、在学中にそれなりに大人にして、社会に送り出す機会を確実に提供することを求められています。

したがって教養教育の中心はあくまでも、多くの大学で教養科目や全学共通科目として開講されている、近代科学の成果であるさまざまな専門分野の知識や技能にもとづいた教育です。しかしそれに加えて、学生が専門職業教育を学ぶのに必要な語学教育や健康・スポーツ教育などの共通基礎教育科目、専門基礎教育科目の他、初年次教育科目や補習教育科目なども思い切って教養教育の科目に正式に含める時期にきていると思います。

それからこの教養教育を担当するのは、各大学で現在実際に働いている、生身の大学教員だということも、非常に重要な条件です。私もその一人ですが、専門分野のことしか分からない、世間知らずの大学教員が、しかも能力の面でも必ずしも優秀ではないし、人間の出来としても必ずしも魅力があるわけではない、ごく普通の標準的な大学教員がそれほど無理をしないで教えられる教養教育はどのような教養教育なのかという観点から、各大学の学部教育のあり方や内容、水準、方法などを考える必要があります。

そうした立場からみると、各学部の専門職業教育の授業は、学部所属の専任教員ならば当然できるはずですが、改革のポイントは教養教育の授業の一部も、学部所属の専任教員に正式に担当してもらうことです。日本の大学教員は特定の専門分野の研究と教育がそれなりにできるから、各学部で採用されたはずですが。ご本人が興味と関心のある研究テーマとか、学生に伝えたい内容は専門分野のなかではかなり狭い領域かもしれませんが、深い内容のものだと考えられます。しかも自分が現在研究している研究テーマが本物ならば、その背景になる専門分野の概論を十分に理解しているはずですが。

それゆえどの大学のどの学部の大学教員も、自分の専門分野に関連した1科目か2科目の概論を、教養科目として、他学部の学生も含めた自分の大学の初学者の学生に分かりやすく、彼らが興味と関心がもてるように教えられるのではないのでしょうか。そしてその授業は大学の学部の枠を超えた全学的な教養教育のなかでも、その大学の学生にとって重要で魅力のある中心的な科目になるのではないかと思います。

今日の日本の大学の学部教育では、同世代の半分を超える多様な人びとが学ぶようになりました。そうした新しい時代にふさわしい教養教育と専門職業教育を、目の前で学んでいる学生のために、自前の人的・物的資源をふまえてどのように構築するのかを、どの大学も問われているのではないのでしょうか。

センター長就任のご挨拶



藤村 正司

平成24年4月1日付けで、山本前センター長の後任としてセンター長を拝命しました藤村です。図らずもですが、今回職責を引き継ぐことにしました。身の引き締まる思いが致します。

広島大学に赴任して一年ですが、25年間勤めた学部と異なり、センターという組織は威信が低く、つくづく不安定であると感じました。なぜ学生のいない機関はそうなるのか、そのこと自体研究対象ですが、この不安定さがセンターのこれまでの高い業績を駆り立ててきたように思います。それだけに学内外のバランスやポジショニングが極めて重要です。

しかし、センターに課された役割は組織の維持だけでなく、わが国の高等教育と社会に資する先を見据えた研究の開発です。山本前センター長を始め歴代のセンター長は、その職責を見事に果たされてきました。私にその力量がないことは十分承知していますが、少しでも貢献できるよう努力して参りたいと思います。小さなセンターは人が変われば組織は変わりますが、センターのエクセレンス、ネットワーク、そしてマルチディスプリナリーの伝統は不易なように思いますし、今後いっそう重要になると考えます。

1972年に設立されたセンターは、多くの先生方や職員の方々の長年にわたる努力により、5月1日で40周年を迎えます。当センターの存在をさらにアピールできるよう、皆様のご理解とご支援を心からお願いして、ご挨拶と致します。

山本先生のご退職によせて



これからの高等教育研究に期待されるもの

山本 眞一

私は、今年3月末をもって広島大学を定年退職いたします。6年間の広島生活でしたが、その間公私にもお世話になりました皆様方とくに広島大学高等教育研究センターの教員・スタッフの皆さんに感謝を申し上げたいと思います。

私の仕事人生は、皆様の多くとは若干異なりまして、大学を23歳で卒業した直後は文部省に就職し、その後の20年間、行政官として学校教育行政その他の事務をしてまいりました。就職直後に配属された大学学術局大学課において、大学院改革の仕事を与えられたのが、そもそもの高等教育との関わりでしたが、当時は大学院というものの実体験もなかったものですから、今から思えば、もう少し委員の先生方の思いを共有できていたら良かったと反省することもあります。ただ、委員の多くは研究者養成の場としての大学院の充実を思い、他方、文部省の行政官は世論や産業界の批判をバックに、高度職業人養成の場としての大学院とりわけ修士課程の充実を考えておりまして、どうしても意見のすれ違いがあったようです。大学院改革の重点は、90年代に入ってから、修士課程における高度専門職業人教育だけでなく、博士課程（後期）におけるさまざまな専門人材の養成にその軸足を移しつつあり、その中には、アカデミックな訓練と世の中のニーズとを如何に結びつけるかという大変難しい問題が含まれているのです。

その後、1977年から79年にかけて、私自身が大学院教育を経験する機会を得ました。それは新構想大学である筑波大学において四つの学際的修士課程大学院が設立され、そのうちの一つであった経営・政策科学研究科に人事院の派遣制度で学んだことです。行政官に政策立案能力を身につけさせるというふれこみで始まったこの大学院において、私は学部時代の法学教育では得られなかったさまざまな経験を行うことができました。「制度」と「実際」というものの関係をいかに考えるか、これは大変むずかしい問題ですが、行政の中にいるとどうしても後者を前者に当てはめるべきとの議論に傾きがちなところを、ここではなぜ制度と実際とは異なるのか、実際にふさわしい制度設計とは何かというように、そもそもその問題に真正面から取り組む訓練を受けることができたように記憶しております。

私の大学との関わりはこれだけではなく、1979年から84年にかけて、東京大学と放送大学の二つの大学において、事務局の管理職を経験しました。ここで、「教官」と「職員」という問題に直面したことが、現在私がメインの研究テーマに掲げている大学経営人材養成と深い関わりがあるのです。この問題の延長上に、私が2000年に全国に先駆けて筑波大学で始めた啓発セミナーすなわち「大学経営人材養成のための短期集中公開研究会」があります。当時、研究としても実践としても注目度の低かった職員問題に陽が当たるようになったのは、これがきっかけであったと今でも思っております。その後、いくつかの大学で大学職員に訓練を与える大学院ができてきておりますが、今年4月から桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科において、このことの教育に当たるのも、そのような因縁があつてのことです。皆さんもぜひ大学経営人材養成問題に関心をもってもらいたいと思います。

さて、高等教育研究は今、大きな曲がり角にあると考えております。広島大学に今のセンターの前身の大学教育研究センターができたのは、1972年のことでした。大学紛争の余塵が収まらない当時においては、大学改革とはまず諸外国に学びつつ高等教育システムの理想を追求することでした。このため、研究者の活躍の場が今よりも広く大きかったことは、まことに皮肉なことでありますが、言葉を換えて言えば、アカデミックな研究がすなわち実践的な研究であり得た時期であったわけです。しかしながら、1990年代から大学改革が本格化し、以前では理想とされていた改革後の姿が現実となりつつあり、高等教育研究は現実を後追いせざるをえないかのような立場に追い込まれてきています。理想を追求し過ぎれば、純粋アカデミックと批判され、かといって現実に踏み込もうとすれば、実務者や関係者との厳しい競合が待っていて、却って役に立たないと言われたりで、研究者の立場も大分難しくなってきたようです。

しかし、私が思うに、アカデミックな研究の中でも、深い洞察力をもって高等教育の様々な事象や本質を探究し、誰も気が付かなかった観点や事実を発掘して、それを世に問うような研究をすれば、そしてそれが現実の大学を動かす原動力になるものだとすれば、これまで同様、実務者や関係者からも尊敬を受けることができるのではないのでしょうか。これを無視して単に業績づくりだけのための論文や著作を重ねるよりは、インパクトのある研究と実践を後輩諸氏に望みたいものです。

山本眞一先生のご退職によせて

渡邊 聡

(高等教育研究開発センター教授)

山本眞一先生は、平成24年3月末日をもって広島大学高等教育研究開発センター教授・センター長を定年退職されます。

山本先生は、昭和47年に東京大学法学部をご卒業後、文部省に入省されました。その後、米国科学財団(National Science Foundation)客員研究員、埼玉大学政策科学研究科助教授、筑波大学大学研究センター教授およびセンター長等を経て、平成18年4月に広島大学高等教育研究開発センター教授として着任され、その翌年にセンター長に就任されました。先生は、学内外は固より、国内外における大学運営、マネジメント、そして高等教育研究に関連する様々な機関において学協会等の発展に寄与してこられました。高等教育研究者としての先生のこれまでのご功績とご尽力については、既に多くの方々をご存知のことと思います。

私が山本先生と同じ職場に勤務し始めたのは、平成14年4月に筑波大学大学研究センターに着任してからのことです。日本の大学・大学院を経験していない私が、新米研究者として初めてわが国の高等教育政策とその形成プロセス、大学組織や人材マネジメントを学び、プロフェッショナル人材教育とりわ

けスタッフ・ディベロップメント（SD）について多くのことを学ぶきっかけと機会を提供してくださいました。また、これまでの研究人生の節々で先生にいただいた貴重なご意見やご指導は、私にとって掛け替えのない財産であり、指導者として今後、私が見習わなければならないロールモデルとなりました。振り返ってみると、先生と同じ職場で仕事をさせていただいた10年間に、共著論文を執筆することも学会報告することも無かったのが、今になって甚だ残念で口惜しく思われます。

先生の誠実で温厚なお人柄は、これまでに多くの研究者や実務家に測り知れぬ影響を与えてこられました。高等教育研究開発センターはひとまず退職されますが、これからも本センター延いてはわが国の高等教育研究が更なる成長と発展を遂げるために、引き続きご指導くださいますようお願い申し上げます。先生がセンターを去られることは誠に残念でありませんが、これまでの先生の長年に亘るご尽力に感謝申し上げ、今後のご活躍をご祈念したいと思います。先生、ありがとうございました。

山本先生に感謝して

清水 栄子

(阿南工業高等専門学校 FD 高度化推進室特命講師)

私は博士後期課程に入学した2007年4月から5年間に渡り、山本先生に指導教授としてご指導をいただきました。

眞面目に見てもデキが良いとは言えなかったこともあり、先生からは常に厳しく多くの指摘を受けましたが、特に刻み込まれたことが、2つあります。1つは、高等教育に関して広く学ぶ視野を持つ、ということです。どうしても、自分の興味のある研究分野のみに関心が向いてしまいがちな私に対して、高等教育に関する広いアンテナを持つことの大切さを常に説いてくださいました。そして、もう1つは、日頃から文章を書く、ということです。この2つは、それが実践できていなかったが故に、学位論文の作成に際して、後悔の念ともなったことから、あらためて先生のお言葉の重みを感じるようになったものです。

指導期間を振り返って思い出深いのは、ゼミ指導の時間です。社会人学生が多いこともあり、休日に指導時間を設定して頂きました。ここでは、ゼミ生が、各自の研究の進捗状況について発表し、質疑を受けるのですが、山本先生は、どのゼミ生に対しても、「どうしてその事象が起こっているのか」と、理由、背景、そして事象の真意について、必ず問われました。大学職員として実践的に役立つ研究を単にしたいとしか考えていなかった私も、繰り返されるその問いに答えようとする中で、更に深く思考することを学び、その結果として、実践への視点も広く深くなったような気がしています。

ゼミ指導が終わると緊張感から解き放たれました。そして、私たち学生と一緒に食事を取りながら、先生のご研究やご経験をお聞きしました。先生は絵をお描きになるのが大変お上手で、その場でスマートフォンをお出しになり、ササッと似顔絵を描いて頂くなど、ゼミ中とは違って変わって、とても楽しいひと時でした。

山本先生 これまでご指導いただき、本当にありがとうございました。これまで先生にご指導いただいたことを基に、これからもさらに頑張っていこうと思っております。今後とも引き続きご指導のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

北垣先生のご退職によせて



高等教育の研究と教育に携わって

北垣 郁雄

高等教育研究開発センターに勤務して12年、その間、センター内外の方々には、たいへんお世話になりました。おかげさまで、高等教育と教育学の研究を大過なく進めることができました。

組織的な教育研究活動、個人研究としての高等教育／教育学等、いろいろな思い出があります。

ほぼ10年前、COEに選定されたときの状況は、今でも記憶しております。数名のセンタースタッフが自然とロビーに集まり互いに讃え合ったこと、拠点リーダーの有本章先生（現くらしき作陽大学学長）がテレビに出演されその概要を述べられたこと、等。特に大きなプロジェクト予算もなかった時期に、突然火が付いたような心境であったと記憶します。

しかし、COEの進行は、恐らく、どのスタッフも予想したほど簡単ではないと感じたものと思います。3～4の研究グループに分かれ、スケジュールの歩調を合わせつつそれぞれのテーマを進めたものの、予期しない競合を経験しました。COEの推進を通じ、改めて共同研究のとりまとめの難しさを学ぶことができました。

COEの中で、私は若手研究者の人材育成の企画に携わりました。全国の高等教育の若手研究者に集まっていたいただき、研究交流の場が設けられました。私自身、かつて教育工学に関する若手研究者集会の参加経験が幾度かありましたので、特に斬新な計らいとは感じておりませんでした。しかし、関係の方々には好評であったと聞き、一つの成果が得られたように感じたものです。

私のかかわったCOE企画で、途中、行き詰まりを感じたこともありました。「大学力」（ミネルヴァ書房）の編集・出版は、そのさなかに始まった企画と記憶します。40人以上の高等教育研究者の先生方にご執筆を依頼したところ、多くの先生方にはご快諾をいただきました。しかし、どなたもご多忙のため、すべての原稿を集めるのにかなりの時間を要しました。いまもなお気の短い私ですが、この活動を通して、「共同作業には鶴首がつきもの」を学ぶことができたと思います。

5年間のCOEを引き継ぐものとして、今現在、大学院教育に係る戦略プロジェクトが進められています。いわゆる学部教育に比べて、専門がより分化・深化されているだけに、領域に応じた調査方法が求められるという難しさがあると感じます。

以上の研究活動に対し、教育活動についても思い出があります。

初期のころは、プレゼンテーションを教育内容としてとりあげ、また研究の対象としました。教育工学の国際学会でしばしば圧倒されるのは、外国人のプレゼンテーションです。堂々たるさまでスピーチを始め、身振り手振りを連発し、ときにはユーモアを挟み…。“プレゼンテーション”を高等教育内容の大きな関心事として扱わないと、国際競争に負けてしまうのではないかと感じたことがあります。

社会人を対象とした高等教育の講座をオムニバスで担当したことも何回かありました。ICT（Information & Communication Technology）を援用した大学教育を採り上げたり、大学で優秀な学生だけを集めて養成するHonors Collegesを採り上げたり…、そのたびに時事性のある題材を用いましたが、どれも社会人の聴講者は熱心に聞いてくださいました。講話の時間が足りないことが多かったと思います。そして、アドミニストレータや事務職員の専門職意識が、以前よりずっと高まったものと確信します。

どの経験も、私をステップアップさせてくれるものであったと思います。事務職員を対象とした講義、教育工学という科目の講義、大学実務向け書籍の出版、大学発ベンチャー企業の促進等、当センター在任中には、いろいろな教育的活動を体験することができました。

12年間の教育体験と研究体験を、今後の活動に活かしていきたいと思います。そして今後、当センターと広島大学の活動を外野から応援したいと思います。

北垣郁雄教授ご退職によせて

秦 由美子

（高等教育研究開発センター教授）

北垣先生とご一緒にお仕事をするようになり、既に3年の月日が経ちましたが、その中でいつも感じておりましたことは、北垣先生の穏やかで温かなお人柄とそのお人柄から醸し出される気品というものでしょうか。現在、ご一緒に高等教育研究開発センターの出版物である『大学論集』や叢書のお仕事をさせていただいておりますが、穏やかな態度の中にも言うべきとき、あるいは決断すべき時には、怯むことのない毅然とした発言や英断をくだされていかれる姿を傍らで眺め、多くのことを学んだことを覚えております。北垣先生の姿勢は、例えて言うならば、剃刀のような鋭さを常時お持ちになりながら、日常的には敢えてその鋭さを示されることなく悠然と過ごされる、といったものでした。本来ならばわ

たくしよりもずっと長く北垣先生とお仕事を共にされてこられた他の諸先生方のお言葉をここで披歴すべきところなのですが、この3年間北垣先生のお仕事をお手伝いする中で学んだことが多々ありましたので、それ故敢えて願って書かせていただきました。

北垣先生は、本センターでは異色ともいえる理工系の大学院、即ち、東京工業大学・電気工学研究科にて電子物理工学を専攻されたという経歴をお持ちで、この経歴が北垣先生の存在基盤を示すものでありましょう。氏の論理的能力の高さを培った背景を示すものと思われまふ。わたくし自身も、研究をする上で多くの示唆を頂きました。的確、かつまた鋭い氏のご意見に幾度となく感嘆したことを覚えております。また、氏はご自身の株式会社「メディアみらい」を立ち上げられたり、数多くのテレビに出られたり、海外で教育工学を教えられたりと、広く社会における活動を活発に行っておられてきたことにも驚きを隠せません。

大学院生への指導も厳しくはありますが、その後の学生の研究活動の進展、かつまた、学生側からの氏への数多くの感謝の気持ちを知るにつれ、氏の指導は的確なものであったことが理解されます。

今後は、退職を氏の一つの区切り、あるいは契機と捉えつつも、更に社会でご活躍していただくことを願っております。

センターにとって大きな喪失であるとは思いますが、しかしながら、悲しむばかりではなく、北垣先生のその優しくも凛とした姿勢を、わたくし自身の中に育てて参りたいと思うものであります。

北垣先生のご退職に寄せて —*spiritoso*

立石 慎治

(東北大学高等教育開発推進センター助教)

北垣先生に、博士課程後期の間、指導学生としてお世話になりました。

現所属先に就職することになって歓送会を開いて頂いた折に、北垣先生からクラシック音楽になぞらえて激励を頂戴したことを思い出します。今回、寄稿文のかたちで思いの丈を述べる機会を頂きましたので、音楽になぞらえてみようと思います。

いま先生は、正に最終楽章を弾き終わらんとされているところだと思ひます。このコリーグが印刷されて手元に届く頃は、ちょうど幕が引いて、鳴り止まぬ拍手喝采が響いている時にあたることでしょうか。それでは、その拍手が鳴り止んだ時、北垣先生の演奏は終わりとなってしまうのでしょうか？ 私には、そうは思えないのです。

お気づきの方もいらっしゃるかと思ひますが、北垣先生のご専門と私のそれは違っています。先生のご専門は教育工学であり、私は教育社会学を基にした高等教育論です。その意味では“不肖”の弟子です。直接、先生のテーマを受け継いでいるわけではありません。もしかしたら、専門分野の違いなどから、指導の際にやりづらさなどを感じたこともおありだったかもしれませぬ。それでも先生は親身に、熱心に指導してくださいました。これから長い年月をかけて取り組むべき課題を指し示してくださいましたこともありました。

確かに、先生の専門分野やテーマを直接的に継承しているわけではないのですが、だからこそ、逆に受け継げるものがあるのではないかと私は信じています。それは例えていうなら、目に見えない“楽譜”のようなものです。分野を超えても大切だと確信していらっしゃることを、先生は私に教えてくださいましたことと思ひます。それを私がいつ物にできるかはわかりませぬが、これからも自分の中で、先生の“楽譜”に則った演奏が絶えず鳴り響くことでしょうか。

先生の演奏が終わらない、とはこういうことです。おそらく、先生が長い年月をかけて演奏してこられたのも、そうやって受け継いだ先人の“楽譜”なのだと思います。そして、将来、私が学生を指導することになれば、先生の“楽譜”をそっと託すことになるのでしょうか。きっと、そのような機会のたびに、また新鮮な気持ちで先生の演奏に再会することと思ひます。

生兵法は怪我のもとなので、なぞらえるのはここでやめて、最後にストレートに感謝を申し上げたいと思ひます。北垣先生、ご指導まことにありがとうございます。

戦略的研究プロジェクト

◆◆◆ 2011年度活動を振り返って ◆◆◆

山本 眞一

(前高等教育研究開発センター長/教授)

この戦略的研究プロジェクトは、わが国の行財政改革と新発展を目指すいわゆる「骨太の方針」を契機に、2008年度から我々が文部科学省から予算措置を受けて開始した「21世紀大学・大学院のあり方」に関する組織的研究である。5カ年計画のこの研究プロジェクトでは、これまでに計画に沿って様々な研究を実施し、また4回の国際ワークショップを開催するとともに、各年度の研究報告書を作成し広く公開してきた。

今年度は、これまでの研究成果を踏まえつつ、大学院教育の実態を把握することを目的に、当センター独自のアンケート調査を実施するとともに、国際ワークショップでは、大学・大学院改革に欠かせない「経営」をテーマとして設定し、講師を招いた。いつものことながら、多数の参加者を得たこと、及び熱心な議論が行われたことに対し、関係者に感謝申し上げる次第である。

言うまでもないことであるが、今日、グローバル化や知識基盤社会化の中で、わが国は社会の各方面での構造改革が求められている。高等教育も例外ではなく、さらにこれらの変化の中で、国家・社会を牽引していく役割を担わなければならない。この点でこれまでわが国の高等教育、とりわけ大学の特徴とされてきた、①日本人の、②若い学生の、③潜在的能力を入試を通じて判断する、という事柄は、今後徹底的に見直されなければならないであろう。

本研究は、数ある高等教育研究のほんの一部であるかのように見えるかも知れないが、組織を挙げた研究活動として、最終年度の2012年度に向け、ますますの充実を図りたい優先度の高いプロジェクトなのである。関係の皆さんのご支援にも期待をいたしたい。

◆◆◆ アンケート調査の進捗状況の報告 ◆◆◆

— 教員と院生からみた大学院教育の現状と課題 —

藤村 正司

(高等教育研究開発センター長/教授)

李 敏

(高等教育研究開発センター・研究員)

戦略的研究プロジェクト「21世紀知識基盤社会における大学・大学院改革の具体的方策に関する研究」(代表：山本眞一)は5年計画の4年目です。2011年度は、「大学院教育の現状と課題」と題して教員とその院生を対象に意識調査を実施しました。大学院教育については、すでに『大学院教育の現状と課題』(シリーズⅠ)と『大学院教育の将来 —世界の動向と日本の課題—』(シリーズⅡ)として研究成果を報告していますが、実態調査は今回が初めてです。昨年12月にアンケートを実施し、教員と院生とそれぞれ1,036人と959人のサンプルを得ました(回収率：教員15%、学生14%)。協力して頂いた先生方、院生の方には感謝申し上げます。

目下集計中ですが、「将来の大学院教育のあり方」について、教員と院生の共通項目の単純集計を表に紹介しておきます。

将来の大学院教育のあり方	教員 (%)	院生 (%)
(1) 多様な院生のニーズに対応できる能力をもった大学教員を養成すべき	42 > 34	75
(2) 職業的汎用能力を育成する	47	69
(3) 専門分野を超えた授業をもっと充実する	47 > 34	65
(4) 院生への経済的支援は競争的であるべき	42	27 < 40
(5) 博士課程進学者に対し、授業を通じて獲得された基礎的な能力の資格試験を行う	42 > 32	40
(6) 修士課程修了単位 (30単位) を少なくする	22 < 36	28 < 43

(1) 数字は「強くそう思う」と「そう思う」の割合

(2) 不等号 (5%水準で有意) は、左が人文社会系、右が自然科学系

大学院政策は、量的拡大から実質化へとセカンドステージに入りました。しかし、大学院教育のあり方について、教員と院生、人文社会系と自然系には違いがあるようです。「多様な院生のニーズに対応できる能力をもった大学教員を養成すべき」、「職業的汎用能力を育成する」、「専門分野を超えた授業をもっと充実する」など、院生の方が「そう思う」割合が高いようです。ただし、コースワークという言葉を知っている院生は、サンプル全体の1割に過ぎません。

なお、教員調査票で「そう思う」の高い項目は、「教員の補充がないまま負担をこれ以上増やすべきではない」(90%)、「大学院に対する政府の支援は、特定大学・分野に偏りすぎる」(80%)、「制度改革より研究科や専攻の裁量で対応すべき」(72%)、「学生の進学需要に応じた入学定員を設定すべき」(70%)、「大学院は、制度全体を見直すべき」(人文社会66% > 自然科学39%)です。他方、「修士課程は、職業人養成に徹すべき」は15%でした。本調査は、戦略プロ報告会 (4月28日 (土)、東京ガーデンパレス) で発表を予定しています。

◆◆◆「日本の大学院教育の人材養成機能とその問題点に関する調査」を実施して◆◆◆

大膳 司

(高等教育研究開発センター教授)

わが国では、第1期科学技術基本計画において、「ポストドクター等1万人支援計画」が打ち出されるなど、博士課程の量的拡充が図られてきたが、修了後の進路については十分考慮されてこなかった。こうしたなかで、アカデミアにおいて定職につける者は限られる一方、産業界でも十分な活躍の場が与えられず、多くが不安定な身分で研究者としての生活を続けるといった、いわゆる「ポストドク問題」が生じている。

以上の背景の下、本調査は、高度な研究・教育の場として飛躍的な充実が期待される大学院教育の現状と今後の課題を探るために、有識者を対象にアンケート調査を実施することにした。

有識者としての調査対象者は、省庁職員、東京都、新潟県、広島県、香川県の都・県庁職員、上場企業・中小企業従業者のうち、大学及び大学院を修了したものを想定した。

アンケート調査の主な質問内容は、大学院進学者には、①進学した大学院を選ぶ際に重視したこと、②大学院ではどのように学習したか、③大学院での学習によって知識や技術はどの程度高まったか、④大学院での学習等にどの程度満足しているか、⑤今後の大学院教育のあり方は、⑥大学院修了後、大学の教員や企業等の研究職以外の職につくことについての意見、等を、これから大学院に進学予定の者には、⑦学部卒業後、なぜ修士課程へ進学しなかったのか、⑧現在大学院への入学を考えているか、⑨なぜ大学院に入学希望なのか、⑩大学院を選ぶ基準は、⑪大学院に進学するにあたってどのような不安があるか、⑫大学院教育での学習によってどのような知識や技術の習得を期待するか、などである。調査方法は、平成24年12月に、上記の官公組織の諸課長や企業の総務部長宛に調査票を5部郵送し、自分の職場の周りの者に配布し、回答してもらうよう依頼した。

最終的には、724名から回答があり、現在、4月28日の報告会で第1次報告ができるよう、データ分析を始めたところである。

第39回研究員集会報告

「これからの大学経営～誰がどのような役割を担うのか～」

大膳 司

(高等教育研究開発センター教授)

第39回研究員集会が「これからの大学経営～誰がどのような役割を担うのか～」をテーマとして2011年11月17日(木)・18日(金)に開催された。

初日セッション1は、金子元久先生(国立大学財務・経営センター教授)「大学経営―課題、組織、人材―」、太田肇先生(同志社大学教授)「これからの人材育成とマネジメント―プロフェッショナルとしての大学職員―」、黒木登志夫先生(日本学術振興会学術システム研究センター副所長、前岐阜大学長)「国立大学改革は道半ば―事務局/教授会/旧帝大/文科省への注文」の3名による基調講演で幕を開けた。

研究員集会の2日目セッション2は、3人の報告者に登壇いただき、大学経営人材の養成に焦点を当て、両角亜希子氏(東京大学)からは「大学経営人材としての職員の役割」、森島朋三氏(立命館大学)からは「大学アドミニストレーターの役割」、山本眞一氏からは「大学経営人材の現状と課題―実態調査の結果から」の報告を頂戴した。

2日目セッション3総括討論では、まず前半で、セッション1、セッション2の発表をもとに、大森不二雄氏によるコメント「これからの大学経営～誰がどのような役割を担うのか～」が行われた。登壇者の返答のあと、続いて、フロアから幾つかの質問が投げかけられた。

経営人材という職員に目が向けがちであるが、大学経営には教員の役割も不可欠であり、大学経営のキーワードは「教職協働」である。両者人材を融合的に養成するためのトレーニングのあり方が重要な課題となる。この課題のために、高等教育関連の大学院プログラムや研修プログラム、そして高等教育研究がどのように貢献できるのか、問われることになりそうである。

なお、本研究員集会の詳細は、本センター発行の叢書最新号をご覧ください。幸いです。



国際会議報告 (APA 科研)

「21世紀型アカデミック・プロフェッション展開の国際比較研究」

黄 福涛

(高等教育研究開発センター教授)

2011年7月18日に広島ガーデンパレスにおいて、広島大学高等教育研究開発センター、文部科学省科学研究費補助金「21世紀型アカデミック・プロフェッション展開の国際比較研究」(研究代表者:有本章 [広島大学名誉教授, 現在, くらしき作陽大学学長])主催, くらしき作陽大学高等教育研究所共催により, 中国, インド, インドネシア, マレーシア, シンガポール, タイ, 台湾, ベトナムおよび日本国内から約20人の研究者とプロジェクト関係者が出席し, 国際ワークショップを開催しました。

2007年以来, 広島大学高等教育研究開発センターが「変化する大学教授職」をテーマに, 五回の国際会議を主催しました。今回のワークショップでは, 近年来のアジア諸国における大学教授職の変化を捉えることを目的として, 特に東アジアと東南アジア諸国の大学教授職の変化に焦点をあてて国際比較研究を通して, アジア型の大学教授職の特



徴を明らかにし、また21世紀型大学教授職を構築することをめぐる課題について議論すると考えています。

以上の趣旨を踏まえて、一日目のワークショップでは、日本を含む十人の報告者がそれぞれの国々における大学教授職の特徴や最近の変化について報告しました。また、この先二年間、アジアの九カ国において共通アンケート質問紙に基づいて大学教員を対象に実施される国際アンケート調査の質問紙や、調査要領および共同計画の作成などについても活発な意見交換を行いました。具体的には、まず、くらしき作陽大学・学長、有本章教授が、このプロジェクトの経緯、目的および意義などについて説明し、また広島大学の大膳司教授が日本における調査計画および概要についても報告しました。続きまして、中国・北京大学の閻風橋教授、インド国立大学教育計画と行政研究所のティラック教授、インドネシア教育部高等教育局のニザム教授、マレーシア・プトラ大学のアイダ教授、シンガポール国立大学ホー准教授、台湾国家教育研究院の陳博士、タイ・チュラロンコン大学のアピパ博士およびベトナム国家社会科学研究院のファム准教授が各国で実施される予定の共通アンケート調査質問紙のドラフトや、国際調査に関するコンセプト・ペーパーおよび自国の今後の研究スケジュールなどについても積極的に意見を述べました。

国際ワークショップを通じて、私たちはアジア諸国における大学教授職の多様化が進んでいること、とくに共同研究を通じてアジア型大学教授職の形成やそれぞれの国々の特徴を解明すること、また知識基盤社会やグローバル化などが進展しているのに伴って、アジア型大学教授職を再構築する重要性も再確認しました。

今後の二年間、センターでは引き続き、海外および国内関係者と連携してアジアにおける大学教授職に関する研究を続けてまいります。

頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム

◆◆◆「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」2011年度報告◆◆◆

福留 東士

(高等教育研究開発センター准教授)

日本学術振興会の頭脳循環プログラムに採択された「知識社会を先導する大学知の考究—新時代の高等教育の展開と人材育成—」は2年目の活動を終わりました。今年度は、渡邊聡教授がカリフォルニア大学バークレー校高等教育研究センターに、島一則准教授がペンシルバニア州立大学高等教育研究センターに派遣され、1年間在外研究を行いました。また、弘前大学の田中正弘准教授がオックスフォード大学日産日本研究所に、福留がカリフォルニア大学バークレー校高等教育研究センターに数か月滞在する機会を得ました。さらに、本プログラムの一環として、上記諸センターや豪州のメルボルン大学高等教育研究センターをセンタースタッフが訪問し、世界の高等教育研究拠点との交流強化が図られました。本プログラムを通して築かれたこれらの人的・組織的交流を今後のセンターの活動にとって意味あるものにしていきたいと思えます。

2012年2月には本プログラムの最初の成果報告会を、「大学ガバナンスと質保証」と題して開催し、田中氏と福留が報告を行いました(2011年度第5回公開研究会)。2012年度は本事業の最終年度となります。この恵まれた機会を存分に活かして、センターの研究ならびに学界に多くの成果を還元できるよう、引き続き努力していきたいと思えます。

◆◆◆～カリフォルニア大学バークレー校高等教育研究センターでの1年間を振り返って～◆◆◆

渡邊 聡

(高等教育研究開発センター教授)

高等教育研究開発センターでは、日本学術振興会による新規事業として平成22年度に始まった「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」に採択されました(事業期間:平成22～平成24年度)。私は、本プログラムによる海外派遣対象者として、平成23年2月に渡米し、カリフォルニア大学バークレー校における恵まれた教育・研究環境のなかで、約13ヶ月間におよぶ在外研究に従事する機会を頂きました。その間、長期に亘る不在であったため、センターの教員・スタッフの皆様には多大なるご迷惑をお

かけし、また大変お世話になりました。この場をお借りしてお詫び、御礼申し上げたいと思います。

渡米後、約1ヶ月後の3月11日に東日本大震災が発生し、想像を絶する規模の大地震と津波は私の故郷である東北・福島に甚大なる被害を与えました。振り返れば、アメリカのテレビ・スクリーンに映し出される故郷の映像を、ただ茫然と見る以外に何も出来ない己の無能さに落胆し、「自分が今なすべきことは研究なんだ」と言い聞かせながら我武者羅に前進することのみに集中した1年間であったように思います。

バークレー滞在中は、まさに頭脳循環を活性化すべく「今ここでなければ出来ない」研究議論に積極的に参加し、「未だ誰も踏み込んでいない領域」における学際的研究に専念するように努めました。また、日本学術振興会サンフランシスコ研究連絡センターの竹田誠之センター長にもお世話なり、平成23年4月にはサンフランシスコ・ベイエリア大学間連携ネットワーク（JUNBA）において、日米高等教育研究の比較考察について報告する貴重な機会も頂きました。こちらでは高等教育研究センター（Center for Studies in Higher Education）の研究員や経済学部の教員といった多くの方々からも、私（および共同研究者）が行った研究に対し、様々なご意見やアドバイスを頂くことができました。これらの研究成果については、今後の学術論文・学会報告等を通して社会的責任を果たし還元を試みていきたいと考えています。

矢の如く過ぎ去った13ヶ月間でしたが、研究者として最も充実した時間を過ごすことが出来た1年間であったと確信しています。このような素晴らしい機会をくださった皆様、バークレー関係者、そしてバークレー・コミュニティの方々に感謝したいと思います。Go Bears!

◆◆◆頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム◆◆◆

島 一則

（高等教育研究開発センター准教授）

2010年度から始まった日本学術振興会の新規事業「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」に、当センターが採択されて2年度目となります。当該事業は2012年までの3年間・総額約7千万円の事業で、その趣旨は「①若手研究者が世界水準の研究に触れ、②世界の様々な課題に挑戦する機会を拡大するとともに、③海外の大学等研究機関との研究ネットワークを強化する」こととされています。採択されたセンターの新事業「知識社会を先導する大学知の考究—新時代の高等教育の展開と人材育成—」の一環として、当方は米国・ペンシルバニア州立大学（PSU）高等教育研究センター（CSHE）へ2011年4月より2012年3月までの期間、客員研究員として当地に滞在しつつ研究活動を進めている。当該センターは米国内において高等教育研究関係のセンターとして、有数のセンターであり、著名なロジャー・ガイガー教授をはじめとする、まさに世界水準の研究者が所属する世界的研究教育拠点です。この意味においては、当該センターに客員研究員として籍を置くことにおいても、①の課題は十分に達成しうるといった恵まれた状況にあるかと思えます。そういった恵まれた環境の中で、特にガイガー教授とは日米両国における公立研究大学の動向とあり方について、チェスロック准教授とは日米の高等教育財政・財務の動向、ポスト教授とは両国での教育系学術雑誌の状況等について議論を深めることにより、自身の研究に対する多くの示唆を得ました。このことは②「世界の様々な課題に挑戦する機会の拡大」の土台作りともなりました。また、③「海外の大学等研究機関との研究ネットワークの強化」については、前センター長である山本教授、またこの頭脳循環プログラムの取りまとめ役である福留准教授の来訪支援を受けつつ、センター間での交流強化も進められたと考えています（この点については2012年度の福留准教授のCSHE滞在により両センターの交流は一層強化されることと確信しています）。最後になりますが、今回の米国滞在中、期せずして米国で活躍する日本人研究者との異分野交流も可能となりました。中でもPSU・Altoona キャンパスに籍を置く、正宗淳氏には米国の数学分野での研究・教育実態、初歩的な数学的思考など、多くの有益な情報、指導をいただきました。このような米国滞在中の経験を生かし、帰国後の2012年度には気持ちを新たに、センターの一員として、コリーグの皆さんのご指導を仰ぎながら、頑張っていく所存です。どうぞよろしくお願い致します。

高等教育公開セミナー報告

平成23年度高等教育公開セミナー「大学改革の成果と課題」

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

主として大学教職員向けに例年開催している高等教育公開セミナーを、平成23年度は8月25日(木)から26日(金)にかけてセンター内で開催した。今回は「大学改革の成果と課題」と題して、センター教員8名によって講義を行った。セミナーへは学内外から18件の参加申込があった。

セミナーの内容は以下の通りである(各講義1時間10分)。1日目(講義1~4)は日本における改革の取組、2日目(講義5~8)は国際的動向をそれぞれ取り上げた。なお、1日目の講義終了後、参加者と講師の懇親会が催された。

講義1 大学改革の効果と影響：高等教育論の立場から(山本眞一)

講義2 大学・大学院の適正規模を考える(村澤昌崇)

講義3 親と子のための大学改革—18歳の岐路—(藤村正司)

講義4 高等教育進学者数の2004年度予測値と実測値との相違—どの程度違ったのか、それはなぜか—(大膳司)

講義5 近未来の大学教育改革—想定内と想定外—(北垣郁雄)

講義6 日米の学士課程カリキュラム改革について—教養教育の変化を中心に—(黄福涛)

講義7 イギリスの大学改革—保守党政権が残した成果と課題—(秦由美子)

講義8 フランスの大学改革—大学の自由と責任に関する法律(LRU)の制定とその後の状況(大場淳)

高等教育公開セミナー in 大阪

福留 東土

(高等教育研究開発センター准教授)

2011年7月2日、大阪中之島のキャンパスイノベーション・センターにて「高等教育公開セミナー in 大阪」を開催しました。2010年12月に引き続き、2度目の開催となりましたが、前回は上回る50名の大学関係者の方々にご参加いただきました。このセミナーは、主として大学職員の方々を対象に、センターの大学院教育の成果を社会に還元する機会を拡大しようとの意図から企画されたものです。

当日は以下のプログラムにより、センター教員5名による講義を行いました。いずれの講義も参加者に関心を持っていただいたようですが、プログラムを半日に詰め込んだため時間が短かったとの声を多くいただきました。今後の企画へ向けた課題としたいと思います。また、セミナー後には、センターの運営する高等教育開発専攻の説明会を行い、関西地区の大学に職員として勤務しながらセンターの大学院に通う大林小織さん(修士2年・神戸大学)、前田一之さん(修士1年・京都教育大学)にセンターの院生としての体験を語っていただきました。

大阪セミナーも2回目となり、センターの企画として徐々に浸透しているように思われます。今後ともセンターの学術的知見を大学関係者に還元する場として継続して開催する予定ですので、多くの方のご参加をお待ちしています。

<第2回高等教育公開セミナー in 大阪 プログラム>

「大学改革と職員の役割・能力開発」 山本 眞一

「近年の大学入試改革：その帰結と今後の課題」 大膳 司

「教員からみた国立大学法人：第1期を振り返る」 藤村 正司

「大学のガバナンス改革：組織文化とリーダーシップを巡って」 大場 淳

「学士課程教育のあり方について考える：海外との比較を通して」 福留 東土

公開セミナー in 博多

秦 由美子

(高等教育研究開発センター教授)

平成23年11月26日(土曜日)に博多駅センタービルにおいて「公開セミナー in 博多」が開催されました。本セミナーは、「公開セミナー in 大阪」に続き今年度初めて博多で開催される公開セミナーです。

当センターでは、公開セミナー、国際セミナー、研究員集会等、高等教育研究の成果を社会に還元するための活動を行っておりますが、毎年夏期に開催しております公開セミナーが好評をいただいていることから、一昨年からは大阪に於いて、また、昨年度は福岡に於いて公開セミナーを開催することになりました。プログラムの内容は下記の通りです。

1	18歳人口減少期の高大接続の在り方を考える — 大学教育効果向上の視点から	大膳 司
2	大学はどのような人材を育成すべきか — カリキュラムの視点から	黄 福涛
3	大学組織にとっての適正規模を考える — 大学院におけるゼミ・研究室を中心に	村澤 昌崇
4	ギャップ・イヤー — 秋季入学を見据えて	秦 由美子

土曜日の午後であるにも関わらず、参加者数は多く、質疑応答も盛んで熱気に満ちた公開セミナーとなりました。

中でも高等教育に関心ある参加者はセミナー終了後も各教員と話し合いを持ち、その後、本センターの大学院に進学する方も居られました。

今後も、目まぐるしく変化する今日のグローバル化社会において、高等教育の役割や教育カリキュラム、教職員の能力開発、高大接続、就職問題などについて大学あるいは高等学校の教職員の方々、高等教育に関心を持つ学生・一般の方々の参加をお待ちしています。



2011年度の公開研究会

* 肩書は当時のもの(敬称略)

	講 師	テーマ
第1回 (2011/6/17)	高橋 光輝氏(デジタルハリウッド大学大学院准教授)	コンテンツ産業論 —コンテンツ人材の育成—
第2回 (2011/7/29)	張 応強氏(広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員/華中科技大学教育科学研究院院長・教授)	中国の高等教育大衆化とその影響
第3回 (2011/9/30)	ドン・ヴェステルハイデン氏(広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員/オランダ・トゥウェンテ大学高等教育政策研究所・教授)	世界大学ランキング批評と“U-Multirank” の新たな試み
第4回 (2011/10/21)	ドン・ヴェステルハイデン氏(広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員/オランダ・トゥウェンテ大学高等教育政策研究所・教授)	Assessment of the Bologna Process half-way: How does the Bologna Process affect quality of learning?
第5回 (2012/2/29)	田中 正弘氏(弘前大学21世紀教育センター准教授) 福留 東土氏(広島大学高等教育研究開発センター准教授)	大学ガバナンスと質保証「イギリスの大学における成績評価の質保証」「アメリカの大学における共同統治と質保証」

センター往来【2011年4月～2012年3月】

*肩書は当時（敬称略）

<2011年>

- 4月 なし
5月 なし
6月 張 応強（華中科技大学教育研究院）高橋 光輝（デジタルハリウッド大学大学院）JOO HwiJung（韓国職業能力開発研究所）張 智恩（韓国国民大学）
7月 APA 国際会議招聘者 [閻 鳳橋（北京大学）Apipa Prachyapruit（チュラロンコン大学）Aida Suraya Binti Md.Yunus（プトラ大学）Pham Thanh Nghi（ベトナム社会科学院）Jandhyala B. G. Tilak（インド国立大学教育計画行政研究所）Ho Kong Chong（シンガポール国立大学）Nizam（ガジヤマダ大学）陳 榮政（国家教育研究院）有本章（くらしき作陽大学）]
8月 なし
9月 Don F. Westerheijden（University of Twente）
10月 なし
11月 国際ワークショップ及び第39回研究員集会招聘者 [本間 政雄（立命館アジア太平洋大学）金子 元久（国立財務センター）太田 肇（同志社大学）黒木 登志夫（日本学術振興会学術システム研究センター）両角 亜希子（東京大学）森島 朋三（立命館大学）大森 不二雄（首都大学東京）] 杜 玉波（中国教育部）白 剛（中華人民共和国駐日本国大使館）馬 贊（中華人民共和国駐大阪総領事館）袁 自煌（中華人民共和国駐大阪総領事館）山地 弘起・劉 卿美・川越 明日香（長崎大学大学教育機能開発センター）
12月 荻田 仁（内田洋行教育総合研究所）

<2012年>

- 1月 二宮 祐（一橋大学大学教育研究開発センター）
2月 田中 正弘（弘前大学21世紀教育センター）
3月 小林 雅之（東京大学）丸山 文裕（国立大学財務・経営センター）大佐古 紀雄（育英短期大学）佐々木 亮（中央大学）田川 千尋（京都大学）濱名 篤（関西国際大学）

馬越 徹先生のご逝去を悼む

追悼：馬越徹先生

大塚 豊

（広島大学教育学研究科教授）

時の流れは矢のようです。昨春、折しも桜の花びらが風に舞う代々幡斎場で、惜しまれつつ散りゆく桜そのものに馬越徹教授が彼岸に渡られるのをお見送りしてから早一年、再び桜の季節が訪れようとしています。一周忌を前に、『コリーグ』誌に求められるままに、大教センター（以下、センターと略記）時代を中心に、故人を偲び、思い出を綴ることにします。

馬越先生は1974年5月1日に文部省調査統計企画課外国調査係からセンター助手に就任されました。すでに九州大学の比較教育文化研究施設で助手を経験され、その後文部省で数年勤務された後でしたので、再び助手となられたのは異例でしょう。センターにはその時に使えたのは助手ポストしかなかったにもかかわらず、馬越徹という逸材をどうにかして手に入れたく、一方、当時の馬越先生の側にも広島への並々ならぬ思いがあったからでしょう。世間の「常識」では「降格」ともとれる人事でも、決めたら敢えて進む意地の人、情の人でした。もちろん、1年後の翌75年5月1日に講師に、次いで77年1月1日に助教授に昇任されたのは、言うまでもありません。センターには助手をそのまま内部昇任させないという不文律があり、これが破られたのは馬越先生のケースの後にも先にもないと言われます。しかし、本来なら講師や助教授としての赴任が不自然ではなかったものであり、この人事、形式上はどうあれ、不文律の例外などには当たらないと、私は見えています。

以来、1986年4月に名古屋大学に転出されるまでの12年間にわたって、馬越先生は文字どおりセンターの屋台骨を支えられました。70年代半ばのセンターは未だ草創期でした。助手3名を入れても専任教員6名、それに兼任のセンター長と数名の事務職員という陣容であり、独自の建物などなく、広島市内千田

町にあった移転前のキャンパスの図書館3階に「間借り」状態でした。当時、誰とはなしに口にしたワーズワースの詩の一節「暮らしは低く、思いは高く」は、物理的、財政的には厳しかったセンターの現実と、その一方で日本の高等教育研究を牽引しているという自負や熱気を見事に表現するものでした。助手の一人として1978年4月からの2年半、同じ広島と比較教育制度学研究室の馬越先輩と二人一室で毎日共に過ごせた日々は、貧しい間借り人の悲哀などはなく、私にとってまさに至福の時と呼びうるものでした。「わたしは彼らより十年くらい年長であったが、同じ研究室出身ということもあり、アジア教育研究三兄弟のような気分を共有していた」（『追悼・西村重夫』2010年、5頁）というふうに考えて下さっていたこともあり、日頃「馬越先生」などと呼んだことはなく、厚かましくも「さん」付けで呼ばせて頂く間柄でした。しかし、呼び方はどうあれ、身近にアジア教育研究の先達を持たないまま手探りで中国研究を進めていた私にとって、馬越さんは他の誰よりも本物の「先生」であり、「学兄」でした。後年、研究科は違っても、同じ名大キャンパスで再び馬越先生の近くで暫く過ごしました。この時も、共同研究などを通じて賜った学恩は数え切れません。70年代末に話を戻せば、小所帯のセンターでは、午後3時にお茶が各部屋に配られていましたが、アジア研究の話になると、そのお茶の時間がつつい長引いたものでした。初級韓国語の手ほどきをあの第一級の使い手から直々に受けたりもしました。ノスタルジアも手伝って、実際以上に幸せに思っているのではという分を差し引いても、泣きたくなるほど、懐かしい日々です。

馬越先生が勤務された草創期から円熟期に向かう時期のセンターは、海図なしに荒海に行く船の如きものでした。海図がない分だけ、手探りではありましたが、逆に自在に行く先を決め得たとも言えます。新機軸を打ち出すことが常に求められていました。当時としては未だ一般的ではなかった国際会議の開催を含めて、世界を視野に入れた学術交流を推進することや、世界の高等教育研究の新たな潮流をいち早く察知し、わが国における研究のアーリーナに取り込むなど、地方大学の1センターには似つかわしくないハイカラな事業と努力が続けられました。そうしたハレの部分の仕事は、主に喜多村和之教授と女房役の馬越徹助教授によって担われていたように思います。この時代に馬越先生は大学がらみの研究・教育はもとより、管理運営のノウハウを身につけられたと推測しています。それがセンター勤務以後の諸大学でさらに花開いたように思えます。いつだったか、「センターでのさまざまな体験を通じて、大学について分からないことはほぼ無くなった」とおっしゃるのを聞いたことがあります。あのセンター時代、馬越先生はしばしば眼球に出血が見られるなど、おそらく疲れやストレスが満身に溜まっていたことは想像に難くありません。しかし、愚痴一つこぼされませんでした。「組織第一」を貫かれた人と呼べるでしょう。

馬越先生を偲ぶ

福留 東土

(高等教育研究開発センター准教授)

私は馬越先生に直接ご指導いただいた人間ではなく、同じ機関に所属したこともありません。しかし、馬越先生から受けた学恩を感じているセンター現有スタッフの一人として追悼の一文をしたためさせていただきます。

初めて馬越先生にお会いしたのは、私がセンターの大学院修士1年の時でした。当時センターにおられた大塚豊先生が大学院の集中講義に馬越先生を招聘して下さいました。著書を拝読していた馬越先生の授業をわくわくしながら拝聴し、多くの刺激を受けたことを覚えています。初日の自己紹介の際に「有本先生の学生です」と申し上げると、「あなたにとっては有本先生なんですね。学生さんの前でそう呼んではいけないけど、僕は彼のことを有本君と呼びたいんです。同級生だから」と懐かしそうにおっしゃられました。通常の授業では簡単なレポートしか書かなかった私ですが、馬越先生の授業では、当時関心を持っていた問題について、力を込めて長いレポートを書きました。すると、次にお会いした際に、「立派なレポートを書かれましたね」と声を掛けて下さいました。当時、研究の道に進むことに自信を持てなかった自分にとって、先生のその一言は大きな励みとなりました。

その後も、学会の場でお会いするたびに暖かい激励の言葉をいただきました。一介の院生のことを気に掛けて下さることがたいへん嬉しく、有り難く感じました。馬越先生の魅力は、私のような直接関係のない人間に対しても心を砕いて下さり、力を与えていただけたところにあるのだと思います。

大塚先生が比較教育学会の会長になられ、私が学会事務局をお引き受けすることになった際には元会長としてのお立場から激励とアドバイスをいただきました。思いも掛けなかった役目に戸惑いと不安しかなかった私にとって、先生のお言葉にどれだけ勇気づけられたか分かりません。

2009年2月には、センター研究会の講師をお引き受けいただき、韓国の大学院改革の現状について刺激に満ちたお話をいただきました。若輩者のお願いであったにもかかわらず、「大学院の問題は重要で、私も韓国の状況についていろいろ調べているから」とおっしゃられてご快諾下さいました。御講演の中でおっしゃられた「大学院問題の理論化が必要である。大学院を分析する理論をぜひつくりだしてほしい」とのお言葉は今でも強く心に残っています。

つい数年前の研究会でのお元気なお姿を思い出すと、今でも先生が亡くなられたことが信じられません。しかし、先生の残された数多くのご業績は、多くの事柄をわれわれ後進世代に語りかけています。センターで比較高等教育論を担当する者として、先生のご著書は今でも、そしてこれからも私にとっての拠り所であり、乗り越えるべき目標です。先生のような偉大な学者であれば、命より長い功績を後世に残せるということも先生が教えて下さったことです。それが遠い道程であっても、馬越先生のような心優しく真摯な研究者でありたいと願わずにはいられません。馬越先生に接する機会を得られた御縁に心より感謝申し上げますとともに、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

*馬越徹先生の追悼文は、有本章先生、安原義仁先生からもご寄稿頂きました。詳しい内容については、当センターホームページ「センタークローズアップ情報」バックナンバー（2011年5月掲載）をご参照ください。

金子先生の逝去を悼む

金子勉君の逝去を悼む

高木 英明

(京都大学名誉教授)

研究室で執務中に突然倒れてこの世を去る—それは研究に没頭し、職務に邁進する者の本望ではなかったか。しかし、そう言うには君は余りにも若過ぎた。享年46歳では、平均寿命が80歳にも及ぶ現代では、文字通り「人生半ば、仕事も半ば」ではなかったか。京都での仮葬儀から約3ヵ月後に京大教育学部で催された追悼会の際、逝去後そのまま保存されていた貴研究室を拝見する機会を得たが、パソコンその他の機器の周りに様々な書類や本が散乱し、多くの段ボール箱が山積みになっているのを見て、君の無念さが偲ばれた。

研究室の散乱は、そのまま独り住まいの部屋の乱雑振りを想起させた。かつて転勤後もなかなか住所を移そうとしないのを気にして、何故転居しないのかと尋ねた時、君は苦笑しながら答えなかったが、傍らにいた友人が「片付けるのが面倒くさいからですよ」と代わりに応えてくれた。確かに引越しをすると本の運搬とその後の片づけが大変だが、片道2時間、往復4時間、あるいはそれ以上を要したであろう通勤時間は君の職務と身体に多大の無理を強いていたのではないか。それに加えて、いつまでも独身生活を続けたことが食生活と体質にかなりの悪影響を与えていたと思わざるを得ない。さらに、ストレスを増幅させ、健康状態に悪影響を及ぼしたと思われるものに職務上の「過労」が考えられる。同じ講座の高見教授は「理事補」として全学的な業務に忙殺されているが、そのことによって「金子君に負担がかかるようなことは絶対にしていませんよ」と言っていたから、それによる直接的な仕事の負担増はなかったと思われる。しかし、近年の大学改革の進展に伴って急激に増してきた書類作りの雑務と高等教育界における形式的・数量的な業績主義あるいは研究成果の点数主義、研究の促成主義（学位早期取得主義）、業績顕示主義（売名主義）等々の風潮の横行が黙示的な圧力になっていたのではないか。

君は大学院終了後、広島大学・大阪教育大学・京都大学等の比較的陽の当たる場所を歩いてきたが、研究成果（執筆物）の数量がそれほど多いとは思われない。ここで業績の数量が少ないと言って君を辱めるつもりはさらさらなく、創造的・独創的研究（課題追及）に真摯に、かつ誠実に取り組めば取り組

むほど、論文執筆は内省的・自己否定的にならざるを得ず、多大の時間と労力をかけるにも拘らず、研究成果は少なくなり、寡作とならざるを得ないと言いたいのだ。質はともあれ、論文や本を沢山書き、学会の基調講演や大学の講義で沢山の聴衆を集め、社会的にもマスコミで活躍し、地方講演でも大いに稼ぐ人が高く評価されるような時代になり、そうでなければ甚だ肩身の狭い思いをする時代となってきた。肩身が狭いだけでなく、大学に籍を置く者は皆がそうでなければならないようにする施策が次々と講じられてきた。「バナナの叩き売りではあるまい」と言って、それを横目で見ながら、じっくりと研究に取り組むスタイルは許されなくなってきた。こういう風潮は、十分時間をかけて資料を探索・分析し、誠実に真実を極めるといふタイプの人には大きなストレスになっていると思われる。でも、温厚篤実な君は、この点についても、皮肉な笑みを浮かべながら「そんなことはありません」と否定するかもしれない。

最後に、君が研究を進めるうちにドイツ地方の大学に興味を持ったのは私の影響かもしれないが、いろいろと教えてもらったのは私の方だ。例えば、ドイツの大学の法制的本質に関わって、中世の一般的団体のあるものは「公法上の社団」となり、またあるものは「独立営造物」になったとされるが、こういうものが前者となり、どういうものが後者となったのか、私は確認できないまま今日に至っているが、ある時君はそれに関係のある「こんな文書がありましたよ」とコピーを渡してくれた。当時私はすでにドイツ研究から離れてしまっていたので、それを追及してみる気にはならず、そのままになってしまった。またずっと後に、特に平成時代に入ってから、大学教授である以上「博士」の学位を持たなければいけないような風潮が生じたので、私も従前の研究の主要部分を纏めて学位請求論文を書くことにしたが、その際君はドイツで集めてきた新しい法制関係の資料を惜しげもなく積極的に提供してくれた。お蔭で私は旧稿を補強することができ、何とか論文の体裁を整えることができたと思っている。今となってはただ「大いに感謝している」としか言いようがない。

ともあれ、心から御冥福をお祈りする。君と高野山の宿坊に泊まった日のことを想い出しながら。

(2012年2月29日)

学兄金子勉を追いかけた20余年

服部 憲児

(大阪大学大学教育実践センター准教授)

助手時代に編集作業にあっていた「コリーグ」の執筆依頼を受けた。センターを離れてから初めてである。こういうことでなければ楽しんで書いたことだろう。金子先生の研究に関しては、『教育行財政研究』（関西教育行政学会紀要）で特集が組まれ、拙稿も掲載される予定なので、ここでは私的なことを中心に書きたいと思う。

金子さんと初めて会ったのは、京都大学教育学部Eコース（教育行政学）の基礎ゼミである。2回生向けのゼミであるが、3回生も一緒に受講するのが慣例であった。そのゼミを受講していた先輩たちの一人が金子さんであった。個性的な人間が多かった講座で、さらに1学年上には南部初世先生（名古屋大学）や雲尾周先生（新潟大学）もいた。その時点では金子さんは決して特別な先輩ではなかった。

思い出してみると、当時からゼミの時には堅苦しい報告をし、小難しくて分かりにくい質問をしてくるのに、雑談やコンパの時にはニコニコ笑いながら冗談ばかり言う愉快な人であった。煙草は吸わなかった一子どもの頃に金魚鉢に煙草をほぐして入れる「実験」をしたら絶滅したからだそうだ。しかし酒はよく飲む。美味しいものを豪快に食べる。よく歌う—カラオケの十八番は財津和夫の“Wake Up”。麻雀も大好きだった。緻密な研究とは正反対のデタラメな、良くいえば豪快な打ち方であった。今となっては健康管理も麻雀ではなく研究のようにしてくれていたら…と悔やまれる。

さて、私が金子さんを意識し始めたのは彼の学部卒業の頃である。教育学部では卒論最優秀者が総代になることになっており（真偽の程は知らないが、そういう噂であった）、金子さんが選ばれた一題目は「西ドイツの大学における意思決定機関の構成原理」。卒業式で学位記を受け取る前に西島安則総長（当時）と酒を酌み交わすパフォーマンスを行い、関西ローカルのテレビでも取り上げられた。このことが、私にとって優れた卒論を書こうという大きな原動力となった。翌年、無謀にも総代を目指してチャレンジしたが、叶わなかったことは言うまでもない。

大学院では同じ部屋で勉学をともにした。金子さんはD3の5月に大教センター（当時）に就職した。

今の時代ではドクター3年終わらずしての中退就職など驚異的であるが、当時でもそう多いことではなかった。さらに周りが驚いたのは、ちょうど1年後に再度大教センターで助手の公募があり、私が採用されたことであろう。まさか同じ研究室から続けて採用していただけたとは誰も想像していなかったであろう。それはさておき、結果的に金子さんを追いかけるようにして大教センターに着任し、1年のブランクを経て再び同部屋になった。その際に1年間助手として働いた経験の差が大きく感じられた。先生方との接し方や電話での応対、手紙・メールの書き方、論集や叢書の編集の仕方など、多くのことを教わった。私は短気な方なので、諫めてもらったことも多々あった—私の嫁曰く、野球の監督で言うと私は星野仙一さん、金子さんは森祇晶さんらしい。

その頃の筆頭助手は佐藤広志先生で、「全国大学教育研究センター等協議会」を立ち上げたのがちょうどこの時期である。センター長の有本章先生の指示のもと、助手で手分けをしてその手のセンターが設立されている国立大学を、『全国大学一総覧』などを片手に探したことを今も覚えている。仕事以外では、3人で大塚豊先生宅にお邪魔して御馳走になったこともあった。栗本一男先生、羽田貴史先生、小方直幸先生を交えて雀荘にはよく行った。理詰め麻雀の栗本先生や佐藤先生は金子さんの自由奔放な打ち方にしばしばペースを乱されていた。また、阿曾沼明裕先生が帰省した時には「食べる修行」と称して院生や事務補佐員も誘い、必ずと言って良いほど焼き肉の食べ放題に行った。阿曾沼先生の方針に従って、ひたすら肉ばかりを食べていた—皆若かったですね…。当時はたいへん忙しいことで有名な職場だったが、今の基準で振り返ってみるとまだゆとりがあったと思う。

私が着任してから約2年、佐藤さんと金子さんが同時に異動された。金子さんは大阪教育大学に着任された。私も半年後に宮崎大学教育学部に着任した。「京大→大教センター→国立教員養成学部」というパターンである。その後、金子さんは出身講座に准教授として戻られ、大教大の後任には私が収まることになった。3年ほど務めた後に、私は現職の大阪大学に異動する。強いて言うなら「→旧帝大」がさらに追加されることになった。ここまで来ると、傍からは金魚の糞かパーマンのコピー人形のように見えているのかもしれない。

この辺りで私の内面を少し正直に話そう。もちろん、ただ追いかけることに満足していたわけではない。同じ釜の飯を食った仲、いろいろな事を最大の信頼感を持って相談した。何事も正直に話せ、正しい答えを導いてくれる兄貴であった。大教センターを含めて、公募を出す際にはすべて相談していた。ただ、おそらく弟の多くがそうであるように、兄を目標に追いかけ、いつか追い越したいと思っていた。私の場合、ライバルと言うには恐れ多すぎる偉大な先輩であったので、完全に追い越せるなどとは思っていなかった。でも、一瞬で良いから前を走って見たかった。そういう気持ちは常にあった。私に残されたチャンスは、学位論文を先に書き上げることだけになっていた。

何人かの先生の助言により、学位論文をまとめにかかったのは大教大時代であった。最初、張り切りすぎて体調を崩して入院してしまった。家族以外で最初にお見舞いに来てくれたのは、他ならぬ金子さんであった。幸い1週間ぐらいで退院した。退院して最初にしたのは、金子さんのところに快気祝いを持っていくことであった。持っていったのはビール1ケースだった（良くなかったか!）。さてさて、真面目な話をすると、金子さん、いやこの場合金子先生には論文の審査委員を務めていただいた。生前の彼の学問に対する姿勢を知る人であれば容易に想像がつくであろうが、かなり厳しい意見をいただいた。しかし、何とか合格にさせていただいて念願は果たすことができた。2人の間に唯一緊張感が漂った時期であった。

すべて片付いた後は、再び後ろを走る日々に戻った。私の自宅が左京区にあるということもあり、何かに託けては祇園に出歩いた—舞妓さんのいるような店にはもちろん行けない。最後に飲んだのはIDE近畿支部夏のセミナーの後。私はいつものように「行きますか?」とだけ声をかけ、いつものように「おお、行こうか!」とだけ返ってきた。いつものバーでいつものように終電まで。主を亡くしたボトルは先輩方の総意で私が管理することになった—今それを1杯いただきながら最後の仕上げをしている。前を走ろうが後ろを走ろうが、こうなってしまうのはどうでも良いことだ…。

もう追いかけるのはやめた…。

新任者・離任者・就職者から一言

2012年度客員研究員



伊藤 彰浩(いとう あきひろ)
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

1993年まで6年間、“大教センター”時代に助手をやっておりました。このところご無沙汰ばかりでしたが、客員研究員に声をかけていただき、何ともうれしく思う次第です。それにしても、この19年間に高等教育をめぐる状況も、センターも大きく変わりました。近年の動きから落ちこぼれ気味の私ではありますが、この機会にキャッチアップすべく改めてコリグ諸姉諸兄から学ばせていただければ有り難く存じます。研究では日本の高等教育についての歴史分析を主に手がけてきました。今はとくに私大の経営行動の歴史に関心があり、戦前から戦後初期にかけての各大学の財務諸表などを眺めています。どうぞよろしくお願い致します。



猪股 歳之(いのまた としゆき)
東北大学高等教育開発推進センター助教

このたび、貴センターの客員研究員となる機会をいただいたことを大変有り難く存じております。勤務校では高等教育研究とともに主に教養教育や学生支援を担う部局に所属し、学生支援の一部も担当しています。さまざまな専門領域をお持ちの先生方と日常的に関わることができるという恵まれた環境のなかで、学生への教育に真摯に情熱を注ぐ先生方の活動を目にする機会も多く、大学の重要な機能のひとつとされる教育の質を高めることの意義を再確認する毎日です。客員研究員としての活動を通じ、貴センターへ何らかの貢献ができればという思いに加え、自身の見識をより高める機会として積極的に活用したいとも考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



大塚 雄作(おおつか ゆうさく)
京都大学高等教育研究開発推進センター長/教授

高等教育が今の時代ほどじくくりまわされることは、これまでなかったのではないのでしょうか？いろいろな制度が入り込んできて、大学教員は右往左往させられているように見えます。しかし、人智をはるかに超える大震災や原発事故に遭遇して、今や、教育は、そういう形よりも内実を確かなものにしていくことが第一に優先されるべきことであることを強く感じます。アメフトの部長を仰せつかって2年、正課外の活動に没頭する学生たちの目を見張る成長を目の当たりにしますと、正課の授業は完全に負けていると思います。それと同時に、部活にできることならば、正課の授業でもできなければおかしいという刺激ももらっています。そのような高等教育の理想に少しでも近づいていくためには、高等教育をフィールドとするわれわれ研究者のネットワークの充実が不可欠です。微力ながら、客員研究員として、そんな使命にわずかながらでも貢献できればと思います。



加野 芳正(かの よしまさ)
香川大学教育学部教授

平成3年から4年間、客員研究員を務めさせていただきましたので、今回で2度目ということになります。この間、政府からは高等教育の変容を促す重要なレポートがたくさん提出され、高等教育の改革が進んできました。しかし、それが大学構成員の心にどれだけ届いているか、また、学生の学びをどれだけ深化させ、人間的成長を促しているのか、さらなる検証が必要です。知識基盤社会の到来とともに、高等教育の重要性がますます強調されるとともに、高等教育の研究者層も厚くなりました。そうした方々の多くはこのセンターと何らかの繋がりをもっています。客員研究員にいただいたことは、私にとって得るところが大きいのですが、私がセンターに対してどのような貢献ができるのか、そのことを心配しています。



近田 政博(ちかだ まさひろ)

名古屋大学高等教育研究センター/
大学院教育発達科学研究科准教授

このたびは、貴重な機会を与えて下さり、大変光栄に存じます。これまで名古屋大学の高等教育研究センターにおいて、14年間勤務してまいりました。同センターは馬越徹先生のご尽力により設立され、先生は初代センター長を務められました。1998年に設立された際、「広島大学のセンターと同じ土俵で勝負したら、長年の研究蓄積、規模、ライブラリーの充実度、社会的影響力のどれをとっても、とうてい勝ち目はない。うちは別の戦略を考えよう」とおっしゃったことを鮮明に覚えています。そこで、学内教職員や学生をターゲットにして、大学教授法・学習方法などの実践研究や各専門分野別の教育改善に取り組んでまいりました。その過程で、広大センターが長年蓄積された高等教育の基礎研究を幾度となく活用させていただきました。せっかくの機会を与えて頂いたので、高等教育分野における基礎研究と実践研究の架け橋的な役割を果たすことができれば幸いです。



鳥居 朋子(とりい ともこ)

立命館大学教育開発推進機構教授

この度はコリーグの一員に加えていただき光栄に存じます。いつしか大学を学校と呼び、自分のことを生徒と語る学生が珍しくなくなりました。でも、やはり大学は大学であって、尊重すべき固有の社会的存在なのです、といちいち青臭く説いています。ときに、学生の屈託ない発想に驚かされることも事実です。先生たちのティーチング・ポートフォリオを読んでみたい、なぜそのように教えているのか知りたいから、と言われた時にはハッとしました。FDやIR等、教育改善を支える様々な仕組みも、学習者の視点に立てばまた違った情景に見えるのかもしれませんが。客員研究員を務めさせていただく中で、多くのアイ・オープニングな瞬間に恵まれれば幸いです。



中村 高康(なかむら たかやす)

東京大学大学院教育学研究科准教授

このたび客員研究員をお引き受けすることになりました。私の主たる専門領域は教育社会学ですが、研究対象の一つとして

扱っているものが大学入試や高大接続に関わる現象なので、高等教育研究の仕事にも今回のように声をかけていただけることも多く、とてもありがたいことだと思っております。ただ、自分自身では高等教育研究者としてはまだまだ精進が足りないと思っております。今回の客員研究員就任はとても良い機会でありますので、高等教育に関する見識をより一層広めることができれば、と考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



西山 雄二(にしやま ゆうじ)

首都大学東京人文科学研究科准教授

大学論や学問論に関心をもつようになってから、豊かな研究蓄積のある広島大学高等教育研究開発センターは憧れの的でした。高等教育をめぐる国際的な催事や研究会、詳細な資料や調査にもとづいた出版物が実に魅力的だからです。

2010年冬、大学や人文学の現状や展望を問う拙映画「哲学への権利」の上映・講演会を開催していただき、センターを訪れる機会に恵まれたことはありがたい機会でした。この度は客員研究員の末席に連らせていただけること、たいへん光栄に思っております。皆さまから良い学問的刺激を受けて、高等教育に関する見識をさらに深め、センターの活動に貢献したいと思います。



森島 朋三(もりしま ともみ)

学校法人立命館常務理事

国際環境や日本経済の位置が揺らぐ中で高等教育の果たす役割も大きく変わらなければなりません。なかでも私立大学は経営環境が厳しいもとで改革をすすめていかなければなりません。この際重要なことのひとつは、事務職員がどのような業務を担うのかということです。私立大学経営は学費収入と国庫助成を基本とした経常的収入により運営していますが、今後はそれだけに頼らない財政の枠組みを構想していかなければなりません。それはとりもなおさず大学のあり様の基本に関わる問題です。教学を財政政策と重ね合わせ大学経営を考えていかなければならない時期にきています。困難な問題ではありますが、これを中心的課題にして研究に参加させていただきたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。



山内 乾史(やまのうち けんし)
神戸大学大学教育推進機構 /
大学院国際協力研究科教授

私は1991年4月から1994年3月
まで、旧大学教育研究センター
の助手を務めました。元助手が

客員を拝命するのは前例がないように思いますが、おそらくは在職時の貢献度が足りず、「もう少しぞうきんがけをせよ」という「古巣からの愛のムチ」と思い、ありがたくお受けすることにしました。私の勤務先は高等教育研究と共通教育の実践をとともにミッションとする組織ですが、いまや全学の教育の司令塔という役割も担っており、これまで日本のIR論ではあまりでてこなかったタイプの組織であると思います。専任は私を含め3名ですが、同僚の川嶋太津夫教授、米谷淳教授いずれも貴センターの客員研究員を務められ、これまでも貴センターの蓄積を生かして仕事をしてきました。だんだん内向きになる自分を叱咤激励して古巣のぞーきんがけをしようと思います。よろしくお願い申し上げます。

2012年度学内研究員



青木 利夫(あおき としお)
大学院総合科学研究科准教授

今年度より、学内研究員をさ
せていただくこととなりました。
わたしは、日本では研究の
少ないラテンアメリカ、とくに

メキシコの教育史を専門としており、学部ではラテンアメリカ社会文化研究、大学院では比較教育社会論を担当しております。研究の中心は20世紀前半の先住民教育ですが、近年ではメキシコの「多文化教育」にも関心をもち、ここ10年でメキシコの農村地域において設置が進められている「インターカルチュラル大学」についても少しずつ調べはじめました。

メキシコの多言語、多文化社会における教育の研究をつうじて、日本でも今後ますます拡大するであろう多文化社会における教育のあり方を考えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。



市来 津由彦(いちき つゆひこ)
大学院文学研究科教授

文学部は人文学科一学科、文学
研究科は人文学一専攻ですが、
実際は内容的に相当に異なる多
くの「分野」を基本単位として

教育研究をしており、これを一つの「人文学」として外に説明しようとする、現場である個別分野の魅力がみえにくくなります(ちなみにわたしは中国思想文化学分野担当)。また、人文学として括られる世界の内容は、社会の言語力、情操、教養に関わり、時々、の状況を越えて、社会に非常に貢献していますが、このことは、「役に立つ」ことを効率的に求める視点からは評価の俎上にのりにくい。このたび学内研究員に加えていただくにあたり、高等教育における教育評価のあり方や理系も含めた他の分野の発信法を学び、人文学の技法とその教育を発信していく方法を探究したいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。



井上 雅晴(いのうえ まさはる)
教育・国際室コラボレーションオフィス主査

私は、広島大学職員を対象と
した大学院修学研修制度によ
り、高等教育研究開発セン
ターで2年間学ばせていただき

ました。その経験を活かして、FD及び教育評価担当を経て、現在は、博士課程教育リーディングプログラム担当として勤務しております。このたび、学内研究員として、本センターにて、あらためて高等教育研究に携わらせていただく機会をいただき、大変ありがたく感じております。どうぞよろしくお願いたします。



張 峻屹(ちょう しゅんきつ)
大学院国際協力研究科開発技術講座教授

私は、都市、交通、環境や観
光などのテーマを幅広く取り
上げ、工学、経済学、心理学、
社会学など、分野融合的な視点

から研究・教育を行ってきています。広島大学に赴任してから10年が経ちますが、21世紀COEプログラム「社会的環境管理能力の形成と国際協力拠点」(2003~2007)、科学技術振興調整費プログラム「低炭素社会を設計する国際環境リーダー育成」(2008~2012)、リーディングプログラム「グロー

バル環境リーダー育成プログラム」(2012～)の
コメンターとして環境教育に積極的に取り組ん
できている。しかし、学生、教育者、研究者や社
会の視点から、関係者全員が納得し、それぞれの
満足度を最大化するための分野融合型教育・研究
を如何に進めるかです。研究員をしている期間に
おいて、この点を重点的に研究したいと思いを
ます。



中矢 礼美 (なかや あやみ)
国際センター国際教育部門准教授

専門は、比較国際教育学です。
2001年4月より広島大学留学生
センター(現国際センター)に
着任し、留学生指導・教育およ
び留学生政策研究に携わってき
ました。この10年間で広島大
学留学生数も倍増したため、よ
り効果的で効率的な留学生支
援体制づくりを模索している
ところ。今年からは、日本人学
生の留学の契機となることを
目指したSTARTプログラム
(教養教育)も担当すること
になり、インドネシアに学生
を引率する予定です。大学教
育の国際化には挑戦的な課題
が多いのですが、非常にやり
がいを感ずります。高等教育
研究開発センターの先生方
のご助言を賜りながら、自
分のできるところから大学
教育の国際化と質保障に貢
献していきたいと思ってい
ます。どうぞよろしくお願
いします。



西村 大志 (にしむら ひろし)
大学院教育学研究科准教授

はずかしながら高等教育研究
開発センターがどういう組織
なのか、まだあまり知りませ
ん。私が広島大学に異動した
ときも、公募で書類をだし、
面接のとき初めて門をくぐ
りました。勤めてみるといろ
んな方とめぐり会えて楽し
い日々です。私の専門は、文
化社会学や歴史社会学です。
小学生の座り方から、蒙古
斑、人体模型、夜食、落語
など興味のおもむくままに
研究しています。そんな訳の
わからない私を呼んで下さ
る高等教育研究開発セン
ターは包容力のある組織だ
なあと思います。ズレた質
問をしたり、奇妙な意見を
述べたりして、高等教育研
究の「常識」に違和感を
もたらすことができれば幸
い。民俗学的に言えば、異
人がムラを活性化するよう
な形でお役に立てればと思
います。



山田 浩之 (やまだ ひろゆき)
大学院教育学研究科教授

このたび学内研究員をさせ
ていただくことになり、たい
へん光栄に存じます。高等
教育研究開発センターでは
、大学院進学

以前にアルバイトなどさせ
ていただき、たいへんお世
話になりました。学内研究
員として少しでも恩返し
ができればと考えており
ます。

高等教育関係では、戦前
を中心に高等師範学校や
帝国大学、地方の実業専
門学校についても研究
してきました。最近
は、対象を現代に移し、
大学生の学習行動など
に関心を持って調査等
実施しております。現
在の大学が抱える問
題は、日本の教育全
体の問題でもあります。
微視的、閉鎖的にな
りがちですが、広い
視野で高等教育を考
えなければならぬと
感じております。こ
れからもよろしく
お願いします。

2012年度教員



丸山 文裕 (まるやま ふみひろ)
高等教育研究開発センター教授

広島大学高等教育開発研
究センターの前身である
大学教育研究センター
の助手を退職して、
25年ぶりに広島大
学に戻ってき

ました。その間は、名
古屋にある椋山女学
園大学と東京にある
国立大学財務・経営
センターで勤務して
いました。大学教育
研究センター時代
は、研究者としての
キャリアを始めたば
かりでした。当時
は、若くて馬力はあ
りましたが、自分
の研究しか頭にな
く、センターや
広島大学のお役
に立てたとは思
いません。

今は研究者としての
経験も積み、馬力
こそ無くなりました
が、若い時には見
えなかったものが
、多少見え、理
解できるようにな
りました。それを
センターや広島大
学の発展に少し
でも生かすこと
ができれば幸甚
です。

就 職 者



景山 愛子(かげやま あいこ)
安田女子大学特別専任講師

2011年4月から広島市にあり
ます安田女子大学現代ビジネス
学部に勤務しています。

学部のタイトルにありますよ
うに、現代のビジネスに役立つ知識とスキルが重
視されたカリキュラムの下、1—2年生に簿記、3
年生に会計学を教えています。

今後も RIHE で会計学の視点から博士論文執筆
を通して高等教育研究に従事して参りたいと考
えております。皆様、引き続き、ご指導を頂きます
様、よろしくお願ひしいたします。



原田 健太郎(はらだ けんたろう)
徳島大学評価情報分析センター助教

2006年の4月に入学以降、6年
間 RIHE の皆様には大変お世話
になりました。大学院生として
過ごした東広島での生活は、一

生忘れられないものになると考えております。入
学してすぐのころ、右も左も分からない状況の中
で、研究のみならず様々なことをご指導いただき
ました先生方には改めて御礼申しあげます。また、
院生からの指導やアドバイスに加えて、職員の方
のご支援があったからこそ、今日に至れたと考
えております。改めて感謝申しあげます。

2012年4月より、徳島大学評価情報分析センター
で勤務することになります。RIHE で学んだ多く
のことを活かして、徳島大学に貢献できるよう頑
張っていきたくと考えております。今後ともよろ
しくお願ひ申しあげます。



廣内 大輔(ひろうち だいすけ)
宇都宮大学基盤教育センター講師

大学研究を生涯の仕事とした
い、そう決意して5年勤めた会
社を退職し RIHE の門をくぐ
ってから8年になる。この間、教

職員及び院生の皆様からは常に温かいご指導を頂
いてきた。とりわけオスロ大学教育研究所への留
学や広島大学教養教育改革準備室で実務経験を積
む機会に恵まれたことは RIHE の院生であったか
らこそ実現したものであり、それらが宇都宮大学
への着任に繋がったことを顧みれば本当に恵まれ

た院生生活であったと思う。

なにより、工場の一作業員として油にまみれて働
いていた私を何の偏見もなく受け入れ、狭い世界し
か知らなかった私の社会性やコミュニケーション力
を鍛えてくれたこと。まがりなりにも留学生活を送
るだけの英語力を付けてくれ、そして大学教員とい
う新しい道に羽ばたかせてくれた RIHE にはいくら
感謝してもしたりないと痛感している。

今後は皆様への感謝を常に忘れず、ここで学ん
だことを社会に還元していきたい。

修 了 生



清水 栄子(しみず えいこ)
博士課程後期修了(2012年3月)

2007年4月、RIHE での学生生
活をスタートしました。“学生”
に戻れた喜びも束の間、仕事と
研究の両立は予想以上に大変で

した。しかし、所属した職場の上司や同僚の理解
を得て、研究という目的をもった生活には充実感
もありました。振り返れば、長いようで、あっと
いう間の5年間でした。その道のりは、決してや
さしいものではなく、挫折しかけたことは何度も
ありましたが、RIHE の先生方、職員の皆さま、
先輩や院生仲間の導きや支えのお陰で修了を迎
えることができたことに、大変感謝しております。

学生の主体的な学びへの支援である米国の
Academic Advising に着目し、研究を行ってき
ました。今後も継続して研究や実践を行い、少し
でも高等教育に貢献できるよう努めていきたい
と思っております。



三好 登(みよし のぼる)
博士課程前期修了(2012年3月)

修士課程では、高等教育を研
究する教員や学生との新しい出
会いと刺激に恵まれた。セン
ターでは教員、学生共に、その

学問のディスプリンは比較高等教育、経済学、教
育工学、教育社会学などと多岐に渡っていること
に加え、これまでの経歴についても多種多様であ
る。このような環境は、通っていた学部と何処か
似通っているため、とても居心地が良く感じられ
ると共に、刺激を受ける毎日であったように思わ
れる。2012年の4月からは博士課程に進学するが、
この恵まれた環境を更に生かせるように邁進して

いきたい。修士課程と同様に、引き続きご指導度
鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



三上 亮 (みかみ りょう)
博士課程前期修了 (2012年3月)

修士課程2年の三上亮と申
します。この度は、晴れて2年の
課程を経て無事修了させてい
ただくこととなりました。思えば
この2年間は、苦難の連続でしたが、主指導の村
澤先生をはじめセンターの先生ならびに職員の方
々のお力添えをいただき、なんとかやってこれ
たように思います。しかし、一人の研究者として
自立する覚悟を伴いこれからはいっそう勉学に勤
しむ所存です。

最後に、この場をお借りして、至らぬ私を根気
強く教示してくださった、主指導の村澤昌崇先生
に厚く御礼申し上げます。これからも、どうぞよ
ろしくお願いいたします。



徐 暁剣 (じょ ぎょうけん)
博士課程前期修了 (2012年3月)

本年度、博士課程前期を修了
することができ、本当にうれし
く思います。私にとって、二年
の留学生活は重要な意義を持つ
といえます。大学時期の、ただの知識の蓄積と違っ
て、自身の研究領域の内に、今まで学んだ知識を
成果に転換しなければなりません。修士段階の学
習は、この「知識を成果に転換する方法」を身に
つける過程だったと思っています。この技術は、
これからの仕事にも役に立つでしょう。こういう
技術はまだまだ未熟なものですから、これからも
磨いていかないといけないと思います。

博士課程前期を無事に修了できたのは、セン
ターの先生方やスタッフの皆様、そして先輩たち
が、いつも親切に私を支えてくださったお陰です。
ここで主指導の黄先生とほかの教職員方、そして
研究室の皆様に深く感謝申し上げます。二年間あ
りがとうございました。

新 入 生



李 麗花 (り れいか)
博士課程後期入学 (2011年4月)

平成23年4月より博士課程後
期に入学した李麗花と申します。
私は、センターが高等教育に
おいて日本屈指の研究機関であ
るからこそ、ここを選んだというより、自分の関
心、自分の研究テーマから考え、ここに入学する
ことを決めました。

センターに入って一年経ちましたが、一人ひと
りの先生方の素晴らしさには感心しました。特に、
不出来な私のことを真面目に指導して下さった
福留先生には心より感謝申し上げます。誠にあり
がとうございました。私はこのような環境に恵ま
れて様々な知識を吸収しながら、視野も日々広
がっていくような気がし、嬉しく存じます。

また、センターのスタッフや院生室の人々には
いつも優しくフォローしていただき、センター全
体がまさに一つの家庭らしく、安心して勉強がで
き、ここを選んで本当に幸せなことだと思います。

今まで学んだ知識を活かし、更なる知識を増や
し加えつつ頑張っていきたいと思っておりますので、今
後とも宜しくお願い致します。



石 敏 (せき びん)
博士課程後期入学 (2011年4月)

中国からの留学生、石敏と申
します。私は2009年10月から
2011年4月まで、外国人研究生
として、センターで1年半お世
話になっておりました。2011年4月、博士課程後
期に入学しました。センターに来てから間もなく
2年半になります。この間で、私の研究の道にい
ろいろな困難がありましたが、センターの先生方、
先輩たち、職員の皆様、同級生たちから大変お世
話になりました。うちのセンターは、研究雰囲気
が素晴らしいだけでなく、先生方や学生同士の
研究精神も素晴らしいと思います。また、職員皆
様のご支援より、留学生の生活を有意義に過ごさ
せていただいております。本当にありがとうございました。
残り2年となりましたが、博士論文に
向け頑張っていきたいと思っております。今後も
多くの方から助けて頂くとありますが、よろしく
お願いいたします。



陳 亦辰 (ちん えきしん)
博士課程前期入学 (2011年4月)

私は2011年4月に博士前期に進学しまして、留学生として順調に一年間センターで勉強しました。センターの皆様からいつもお世話になっており、非常に充実し、楽しい留学生生活を過ごしました。入学したばかりの時は、大学院の生活がまだ慣れなかったですし、教育における知識も足りなかったのですが、先生や先輩のおかげで、三か月ぐらいが経ち、センターの雰囲気には溶け合いました。今年から二年生になり、修士論文のこともきちんとやらなければなりません。日本における女子大学の教育理念を研究し、歴史的と比較的な視点から、日本の女子大学の発展や存在意義を論じます。中国は、一つ二つぐらいの女子大学しかありませんが、日本の女子大学を参考にし、もっと発展できると思います。今年もよろしく願います。



前田 一之 (まえだ かずゆき)
博士課程前期入学 (2011年4月)

2011年4月に入学以降、早一年が経過いたしました。社会人学生のため、就学にあたっては多くの便宜を図っていただく必要がありましたが御指導いただきました先生方の厳しくも温かいお力添えにより何とかこの一年を終えることが出来ました。

私の直接の入学動機は2010年12月、大阪で行われたRIHEセミナーに遡りますが、受講した時の喜びは今でも忘れることができません。入学後一年を経過しましたが、この一年間、受講した科目の数々は私の好奇心を満たすに余りある内容でした。セミナー受講当時の喜びはいささかも色褪せず、RIHEで学ぶことのできる充実感を実感しています。高等教育に対する独自の視点を獲得すべく今後も研鑽を積んでいきたいと思っております。

外国人研究生



袁 婷 (えん てい)
(2011年10月)

中国から来た留学生です。2011年10月より、研究生としてセンターで学ばせていただくことになりました。最初は高等教育分野についての知識がほとんどなかったのですが、授業の内容もよく理解できなかつたし、レポートもうまく書けませんでした。幸いなことに、先生や先輩方々から熱心に支えていただき、研究の土台を順調に築けるようになりました。そして、センターの素晴らしい研究環境に身を置き、私も知識欲が掻き立てられています。この短い半年を振り返ると、センターの皆様のおかげで、いろいろ体験して視野が広くなり、充実した留学生生活を送ってまいりました。これからは、一層努力して自身の研究活動を深めていき、マスター2年間を有意義に過ごしたいと思っております。まだまだ未熟者ですが、今後どうぞよろしく願います。



林 師敏 (りん しびん)
(2011年10月)

2011年10月より、研究生としてセンターでお世話になっております。初めて日本に留学にまいりましたので、新鮮に感じるとともに不安に感じるところもあります。既に5ヶ月を過ごしましたが、慣れないこともたくさんあります。センターの皆様のサポートのおかげで、充実した生活を送るようになりました。これから、センターでの講究や研究会などを通じて研究の視野を広げ、高等教育研究の方法を身につけるように努力します。まだまだ慣れないことや高等教育についても勉強しながらやりたいと思っておりますので、どうぞよろしく願います。

センター滞在記

広島大学高等教育研究開発センター滞在記



張 応強

(華中科技大学教育科学研究院院長 / 教授)

日本語訳：李 敏

(高等教育研究開発センター研究員)

光陰矢のごとし、三ヶ月の訪問研究はあっという間に過ぎてしまいました。

1999年に南京師範大学でポストドク研究を終了して以来、初めてこのような研究だけに専念できる時間を得ました。このような貴重な機会を提供していただいた広島大学高等教育研究開発センター、とりわけ山本眞一センター長と黄福涛教授に感謝を申し上げます。

三ヶ月の訪問研究は忙しいですが、きわめて充実した時間を過ごせました。滞在期間中、私は中国教育部哲学研究社会科学の重要研究課題である「中国特色のある現代大学制度を建設するための大学学長管理の専門化を改善することに関する研究」の申請書を作成しました。この研究課題は中国の哲学社会科学分野で最も重要な課題の一つであるため、研究資金の獲得を巡る競争は熾烈そのものです。申請書を作成するために、私は大量の文献を閲読し、多くの時間をかけて、42,000字にのぼる申請書を書き上げました。その苦勞が実ることを願っております。きっと RIHE から幸運をもらえるだろうと確信します。

RIHE 滞在中、私は「中国の高等教育大衆化とその影響」をテーマに、7月29日に公開研究会を行いました。院生の呉書雅さんが通訳を担当してくださいました。本当に感謝します。

そのほか、研究集会に2回参加しました。7月18日に RIHE 主催の「21世紀アジアにおける大学教授職に関する国際比較」と8月8日東京大学総合教育研究センターの招待講演です。東大において、「中国の高等機関に関する研究：現状、問題と展望」をテーマに発表を行い、高等教育機関に関する日中の比較をめぐり、日本の研究者と意見交流を行いました。その後、中国高等教育専門委員会理事長として、日本高等教育学会の金子元久会長を訪ねました。

研究訪問期間中、論文の執筆にも励んできました。武漢理工大学の馬廷奇教授と共同で執筆した「学習自由の実現とその制度の構築」という論文は、中国の権威的教育専門誌『教育研究』に掲載されました。東京大学総合教育研究センターで発表した報告「中国の高等教育機関に関する研究：現状、問題と展望」は、『高等工程教育研究』で掲載する予定となっています。また、『北京大学教育評論』の依頼で「『学科論』と『研究分野論』の論争を超越する—中国高等教育学学科建設の方向性に関する認識」、そして『江蘇高教』の依頼で、「中国における世界一流大学建設に関する検討と反省」をそれぞれ執筆しました。それと同時に、「現代大学制度革新と探索国際フォーラム」と中国高等教育学専門委員会2011年学会のために、「大学内部ガバナンス改革：アカデミックパワーの実体化」と「現代学科としての高等教育学の建設」という2本の論文を書き下ろしました。

この三ヶ月は、研究だけに専念できる貴重な時間を得ました。それにしても時間が足りないなあという緊迫感は常に付き纏われています。やるべきことは山ほどあります。

研究以外に、ほぼ毎晩 QQ (チャットソフト) を通して、華中理工大学の同僚と情報交換を行い、学院の日常運営に参加しました。海外にいるとは言え、学院長としての責務を果たさなければならないからです。

今回の三ヶ月の訪問研究のおかげで、私はきわめて規律正しい生活を送るようになりました。毎晩、必ず1時間以上ウォーキングし、三ヶ月の間に西条の隅々まで踏破しました。また、毎日往復1時間の自転車通勤も、絶好な運動となりました。

最後に、RIHE の事務の皆様、資料情報室の皆様に感謝しなければなりません。特に、荒木裕子氏が住居の手配、外国人登録、銀行口座の開設などの生活の面で、行き届いた世話をしてくださいました。そして李敏研究員が私の研究生活と日常生活に大きな援助をくださいました。特に雨の日、必ず車で私を送迎してくれました。李敏研究員のおかげで、RIHE での三ヶ月はきわめて充実した時間となりました。

そして、センターの留学生の皆さんは、私の単調な生活に明るい色彩を加えてくださいました。心より感謝します。

(張先生は、平成23年6月から8月まで広島大学外国人研究員としてセンターに赴任されました。)



Reflections at Departure

Don Westerheijden

(Senior Research Associate at Center for Higher Education Policy Studies (CHEPS),
University of Twente, The Netherland)

Looking back on three months at RIHE may become easy after three years, but at the moment of writing, on my last day in Higashihiroshima (a name I still cannot type without checking it thrice), the mind is too full of impressions to single out what has been the decisive insight or moment that I take away from this study visit. I have ensured that there would be very many impressions: not only by contacts within RIHE, but also outside it, so I owe this problem of the full mind to myself.

The professional contacts outside of RIHE were with other higher education researchers around the country, which familiarised me with the excellent shinkansen between Hiroshima, Tokyo and even Sendai ('Ganbaru Tohoku' as it said on the t-shirts), with stops along the way, such as in Nagoya. These visits gave me a chance to get insights into current trends in Japan's higher education system, academic life and culture from various points of view: inside and outside of universities (NIER) inside and outside of mega-city Tokyo (for some the only place to live, for others the source of power and reform), public and private institutions (Hiroshima, Tohoku, Nagoya and briefly Tokyo on the public side, Meiji and Oberlin on the private). For comparative study of academic rituals, it was also highly instructive to attend the conferring of the Ph.D. degree to Hada-sensei, my kind 'local mentor'.

If I have not been as successful as I had hoped in advance in reading half the RIHE library or writing a large piece on a topic that was until now new for me, there are three things to blame: myself in the first place, the immense size of the library in the second place and thirdly the internet. Foreign study visits are not the time for lonely, deep thought and undisturbed reading that they once used to be, now that one remains connected with home and the home university by e-mail, Firefox, Facebook, Twitter and Skype? the number of channels indicates how hard it is to cut all connections. Moreover, I did not want to cut all connections, of course! (That is where my part of the blame begins.)

Still I have found time to breach some new ground for myself, which will become visible in future publications. Besides, I hope to have contributed something to RIHE's debates by showing a European mirror on issues in several seminars and papers.

Finally, all of the above has given rise to firm plans to continue and expand our cooperation, in the spirit of the four centuries old Japanese-Dutch connection. The friendly atmosphere among the colleagues and the excellent support from the staff make me look forward to it!

And I did not even mention the joys of food and drink or the thousands of pictures from the weekend trips yet...

(ヴェステルハイデン先生は、平成23年9月から11月まで広島大学外国人研究員としてセンターに赴任されました。)